

「貪欲に気をつけなさい」

ルカの福音書 12:13~21

はじめに

今日の内容はタイトルにあるとおり「貪欲」に関するイエシュアのたとえ、教えとなっています。みなさんはこの「貪欲」という言葉をどんな意味で捉え、またどんなイメージを持っておられるでしょうか。一般的にこの言葉は、欲しいものを激しく求め、諦めることも満足することもなく求め続けていくというような、そんな意味の言葉として捉えられています。ではイエシュアはこの言葉をどのような意味で用いられるのでしょうか。そこに入る前にまずここまでの状況、文脈を確認しておきたいと思います。

- ① イエシュアは、この時代は神のことばを聞かない「悪い時代」だと言われた(11:29)。
- ② 一人のパリサイ人がイエシュアを家に招いた(11:37)。
- ③ イエシュアはパリサイ人たちの偽善、罪を暴き、「わざわざいだ」と言ってこれを激しく非難した。
- ④ パリサイ人および律法学者たちはイエシュアに対して激しい敵意を抱いた(11:53)。
- ⑤ イエシュアは弟子たちに向かって、人を恐れるな、その敵意、殺意を恐れるなと言われた(12:4)。
- ⑥ ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる御方である神を恐れなさいと言われた(12:5)。

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。

12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

このように、文脈としては当時のユダヤ人の霊的指導者であったパリサイ人や律法学者たちが持っていた権威、権力「からだを殺しても、その後はもう何もできない者たち（ルカ 12:4）」すなわち人の権威、権力を恐れるのではなく、「殺した後でゲヘナ（火の池）に投げ込む権威を持っておられる方（ルカ 12:5）」である神を恐れ、神に聞き従えというようなテーマで話は進んでおり、人の権威、権力にはるかにまさる神の権威、権力についてのおしえが要点、論点となっていることを覚えてください。この状況、情報をふまえた上で今日のこの「貪欲」という言葉とそのたとえの意味を考えなければなりません。それでは今日の内容に入ってまいりましょう。

1. 任命

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:13 群衆の中の一人がイエスに言った。「先生。遺産を私と分けるように、私の兄弟に言ってください。」

12:14 すると、イエスは彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停人に任命したのですか。」

ここでイエシュアは「わたしはあなたの裁判官や調停人ではない」と言っておられるのではありません。事実イエシュアは神としてこの世のすべてを裁く権威をお持ちです。ですからここでの論点は、先に述べたように権威、権力についてです。つまりここでイエシュアは「**いったいだれが、わたしを…任命したのですか。**」つまり誰が私に権威を与えられたのかと問うておられ、ご自身にそのような権威、権力を与えたのは誰か、イエシュアの権威は人からのものなのか、それとも神からのものなのかと問うておられるのです。これに対しこの「**群衆の中の一人**」は何も答えてはいませんが、それはもちろん、イエシュアの権威はただ神からの権威であり、イエシュアは神の御子であられ、天におられる父なる神からその同じ権威、同じ権力を与えられているのです。重要な論点はここであり、決して財産分与の話などをしていないのです。人間の権力者、「**裁判官や調停人**」だけにとどまらず、王や大統領、大臣のような、大きな権威についても言えることですが、それらはみな人々から選ばれ、人によって与えられた「**からだを殺しても、その後はもう何もできない者たち**（ルカ 12:4）」の権威、権力です。しかしイエシュアは神から与えられた権威、天と地と地の下にある万物のすべてを従わせる神の権威、まさに「**殺した後でゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方**（ルカ 12:5）」の権威を与えられた御方なのです。私たちはこの御方をこそ恐れ、ただその権威を恐れなければならないのです。

2. 貪欲

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:15 **そして人々に言われた。「どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があり余るほど持っていますが、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」**

最初に述べた「**貪欲**」という言葉がここに登場します。この箇所におけるこの「**貪欲**」という言葉の意味は一般的な意味としてのそれではありません。聖書の原語であるヘブル語ではこれをベツァ(**בצא**)といい、その初出箇所、その本来の意味は以下の出来事にあります。

創世記【新改訳 2017】

37:26 **すると、ユダが兄弟たちに言った。「弟を殺し、その血を隠しても、何の得になるだろう。**

37:27 **さあ、ヨセフをイシュマエル人に売ろう。われわれが手をかけてはいけない。あいつは、われわれの弟、われわれの肉親なのだから。」兄弟たちは彼の言うことを聞き入れた。**

これは兄たちに憎まれた弟のヨセフが殺されかけるという場面ですが、ここで「**何の得になるだろう**」という箇所に聖書で最初のベツァがあります。このように疑問文のようですが「**殺し、その血を隠**」すことすなわち抹殺しこの世から消し去ることが「**得になる**」か、というような意味でそれは使われており、つまり「**貪欲**」と訳されたベツァは本来、殺意や殺人を指し示す言葉であるということなのです。このような意味で「**貪欲**」ベツァを捉え、解釈するならば、ここまでの文脈と意味がつながります。つまりこの「**貪欲**」とは「**からだを殺しても、その後はもう何もできない者たち**（ルカ 12:4）」という人の権威、権力を言い換えたもの、たとえたものなのです。ですから「**どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい…その人のいのちは財産にあるのではない**」とは人の力、人の権威、権力では「**人のいのちは**」は救えない、こ

の「人のいのち」とは人の肉体が死んだ後の人の霊、たましいのことであり、「からだを殺しても、その後はもう何もできない者たち」の権威、権力では、決してこれを守ること救うこともできないという意味がここにはあるのです。みなさん、今私は私たちの現実から遠くかけ離れた世界の話をしているのではありません。また空想話やおとぎ話をしているのでもありません。今すぐにでも起こり得る、すぐそばにある現実の話をしているのです。もし次の瞬間、何等かの要因でその身体の機能が停止する、つまり死ぬならば即座に起こる現実の話です。事件、事故、病気、災害そして戦争、私たちがこれらに見舞われることなく、いつまでも健康で安全無事に生きられると考える方がよほど非現実的です。私たちはみな明日どころか次の瞬間を生きられる保証さえないのです。そして何より人はみな必ずいつかは死にます。その時が来たならば、人にはもはや何の力もありません。どんな人の権力も財力も無力となり無意味となります。ただ「殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方」にのみ力があり、私たち「人のいのちは」みなこの御方、神であられる主イエシュアに委ねられるのです。その事実、その真実、その現実が明確にたとえられた、表されたものが次の箇所です。

3. 愚かな金持ち

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:16 それからイエスは人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。

12:17 彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』

12:18 そして言った。『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。

12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。』

12:20 しかし、神は彼に言われた。『愚かな者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

もはや説明の必要がないくらいわかりやすいたとえです。イエシュアはその公生涯の中で多くのたとえ話をなされましたが、上記のものは他のものと大きく異なっている点があります。それは、神という存在が何にたとえられることもなく、そのまま神ご自身として登場しているという点です。他のたとえは神が王や父親、しもべの主人や農夫などにたとえられて登場しますが、このたとえだけは神が神ご自身としてそのまま登場しておられ、ですからこれはもはやたとえというよりも神からすべての人に対する直接的なおしえ、教訓、いや警告と言えます。そしてこれに神ご自身がそのまま登場することで神という御方がどのような権威を持っておられるかということ、すなわち人の「たましい」を取り去る権威を持っておられるという現実を、神を信じる者にも、また信じない者にもわかりやすく伝えようとしておられるのです。ですからこれは謎めいた秘密のメッセージではなく、神から人への明確な警告です。まさにこう言われているとおりです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

4. 神に対して富む

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:21 自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。」

ですから私たちは「神に対して富む者」となることを求めましょう。それは神に愛される者、祝福される者であり、「たましい」が救われる者のことです。逆に「神に対して富まない者」はみな火と硫黄の池「ゲヘナ」に投げ込まれます。こう預言されているとおりです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

20:14 それから、死とよみは火の池（ゲヘナ）に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

20:15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

このように、「神に対して富まない者」は永遠に苦しみ続ける者となるのです。

では私たち「神に対して富む者」は一体どこに行くのでしょうか。聖書は明確にこう記しています。

テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

やがて主イエシュアは「天から下って来られます」。その時もし私たちが死んでいるならば「よみがえり」もし「生き残っている」ならば死を通ることなく「一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で」主イエシュアと「会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」これが「神に対して富む者」としての私たちに与えられる、神が計画しておられる事実、現実です。「ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい」とあります。聖書には今を生きる私たちの励まし、慰めとなり得る言葉は数多くありますが、「これらのことばをもって…励まし合いなさい」と聖書が人を励まし慰めるために明確に推奨している御言葉はこの一箇所のみです。つまりイエシュアの「空中再臨」、「携拳」とも呼ばれるこの事実は、この神の預言、神のご計画は、私たちの唯一の希望、唯一の救いなのです。

先ほども述べたように、たとえどんなに努力しても、「人のいのち」すなわち「たましい」について人は全くの無力です。その権威、権力はただ神にのみあり、神の御子イエシュアにのみそれがあるのです。この事実を信じ、受け入れ、そしてやがてこの御方が天から下って来られるその日を待ち望みましょう。